数字で見る酒類業界の30年

Beer Saké Wine Whisky Shochu

この資料は●▲■　きた産業　メルマガ・ニューズ　●▲■　vol.274からvol.285（2021年5月から12月）の文章をベースにしています。
以下は、●▲■きた産業　メルマガ・ニューズ●▲■　vol.274（2021年5月14日）の序文です。

30年前と今とでは、街の風景はそれほど変わっていないが、
社会や経済は相当違っていた。

1991年の日本は、アメリカに次ぐ経済大国。
80年代のバブルを引きずっていて
「BMWは六本木のカローラ、ベンツは白金のサニー」などと言った。

一方で、90年代の長期不況＝「失われた10年」に突入していく頃。
有名大企業の経営破綻や、
生き残りのため、ライバル同士や財閥系列を越えた企業統合が始まった。

総人口は1億2,000万人強で今とほぼ同じ（正確には100万人ほど多い）。
だが、30年前の人口構成は今と全く違った。丸めていえば、、、
　19歳以下の未成年：1,000万人多い
　20～64歳の主要就労（＝主要飲酒）人口：1,000万人多い
　65歳以上の高齢者：2,000万人少ない

●消費税は3%、逆に法人税は高くて実効税率約50%（今は約30%）。
●ネットやメールはビジネスで使われていない。仕事机にPCがなかった。
●携帯電話：今でいうガラケーが出始めたころ。持つ人はとても少なかった。
●夜8時・9時まで働く人が多くて、「24時間戦えますか」が流行語。

●EUは未だできておらず、仏・独・伊はフラン・マルク・リラだった。
●中国は今と異なり、訪れると貧しい市民生活や劣悪な衛生状態を目の当たりにした。
●日韓関係は、戦後の長いトンネルを抜け、ようやく良好になり始めたころ。
●海外でSakeを飲むのは駐在員や日系人で、現地の人の需要は僅かだった。

そんな30年前から、コロナ渦中の現在までの流れを、
　　ビール編、清酒編、焼酎編、ワイン編、ウイスキー編、、、
など、酒類ごとに分けて書くことにします。

時々、個人的な10年後＝2030年予測も、付け加えます。

以下の資料の中で

で示すのは、30年前との
変化量の比較です。

数字で見る酒類業界の30年：**Beer**

fig.B1 日本のビール類3種の市場（万KLとシェア）

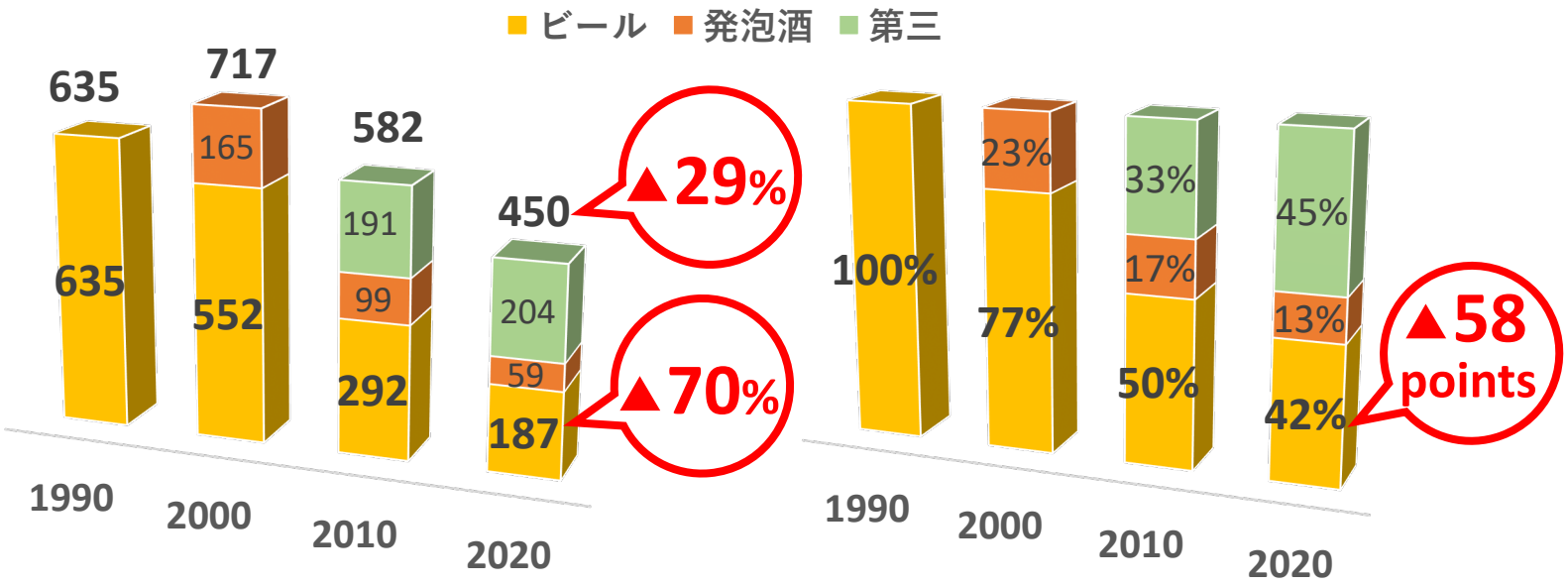


fig.B2 世界のビール市場（万KL）

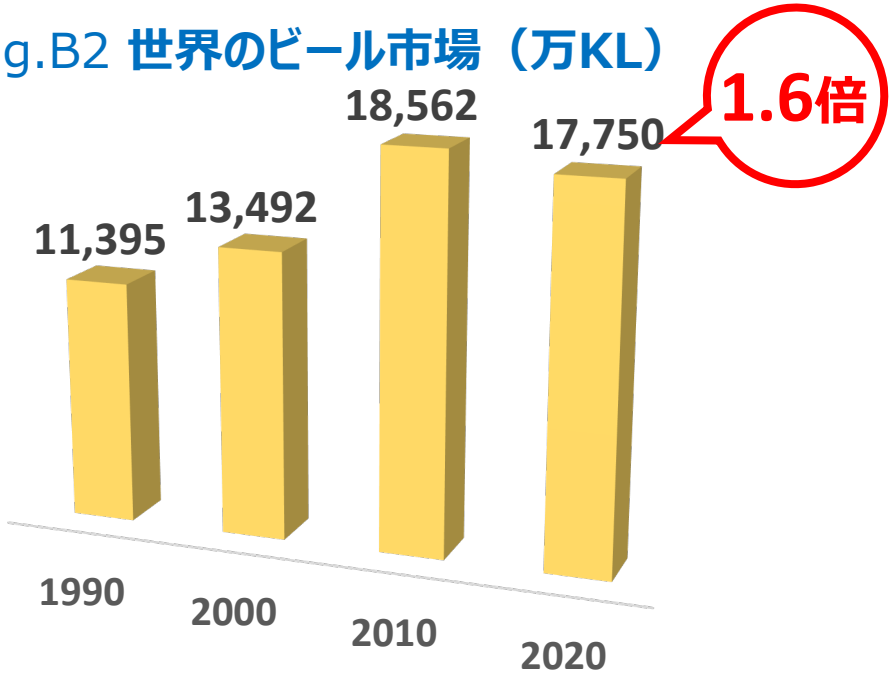


fig.B3 日本のクラフトビールの醸造所数

fig.B4 アメリカのクラフトビールの醸造所数

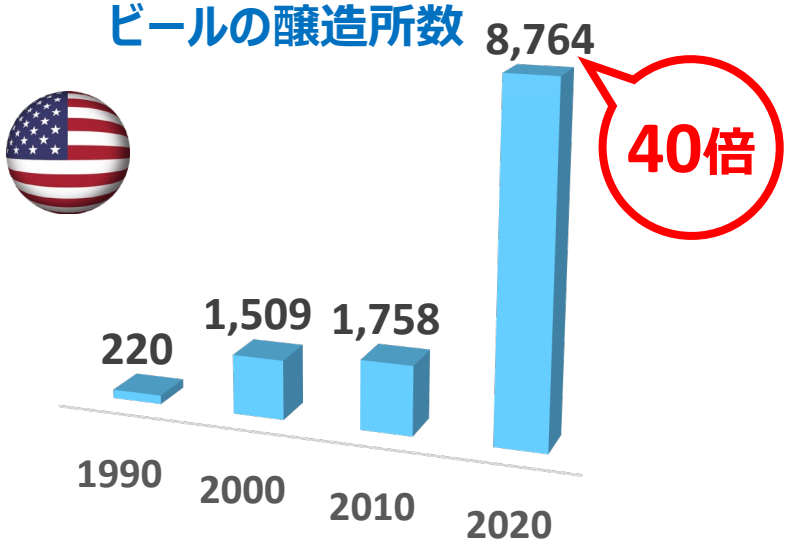


fig.B5 出荷量の世界ランキング

	※1986	2000	2010	2020
1位	Budweiser	Budweiser	AB InBev	AB InBev
2位	Miller BEER	Heineken	SAB MILLER	Heineken
3位	Heineken	Interbrew	Heineken	雪花 SNOW
4位	KIRIN BREWERY	AmBev	Carlsberg	Carlsberg

※1990年のデータがないので1986年を記載

数字で見る酒類業界の30年：Saké

fig.Sa1 日本酒の生産量（万石）と製造場数（場）

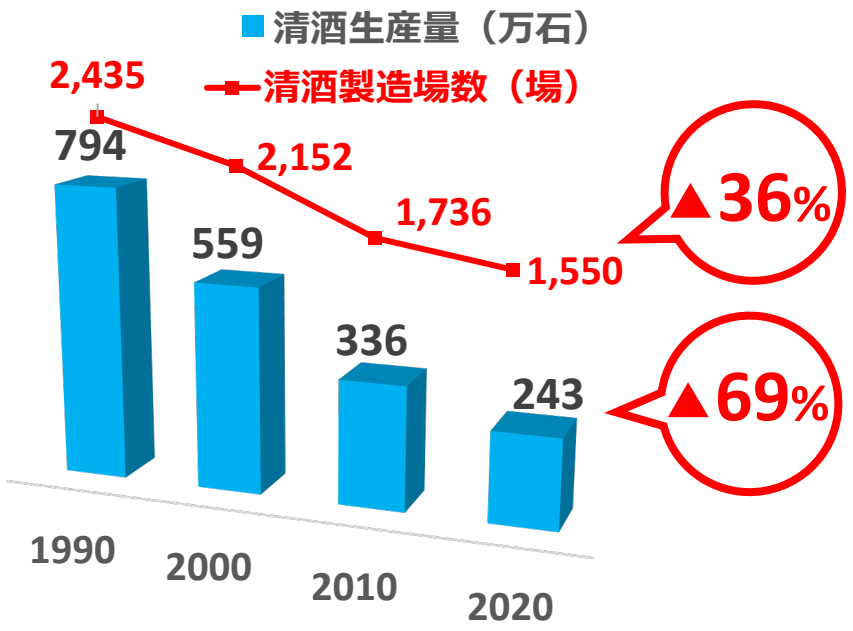


fig.Sa2 日本酒の一升びん（億本）と紙パック比率（%）

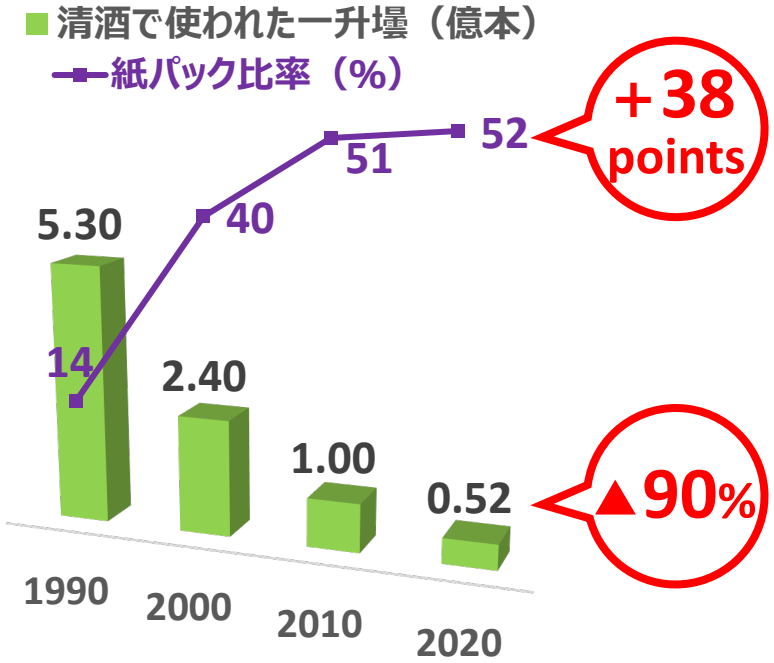


fig.Sa3 日本酒の輸出量（万石）と金額（億円）

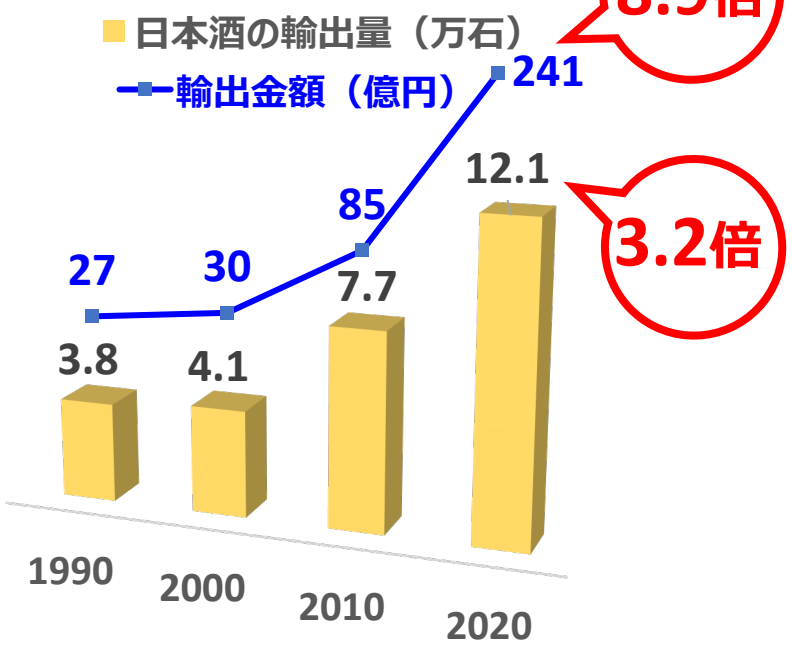


fig.Sa4 市販酒でびん燗殺菌を採用している蔵数（推定、概数）

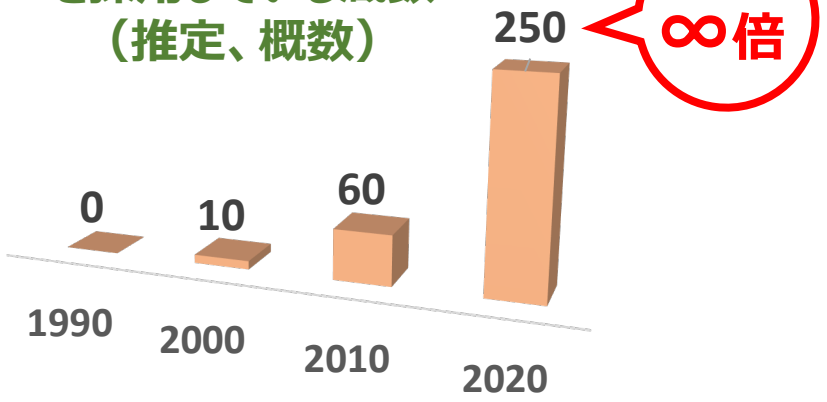


fig.Sa5 合成清酒の生産量（万石）

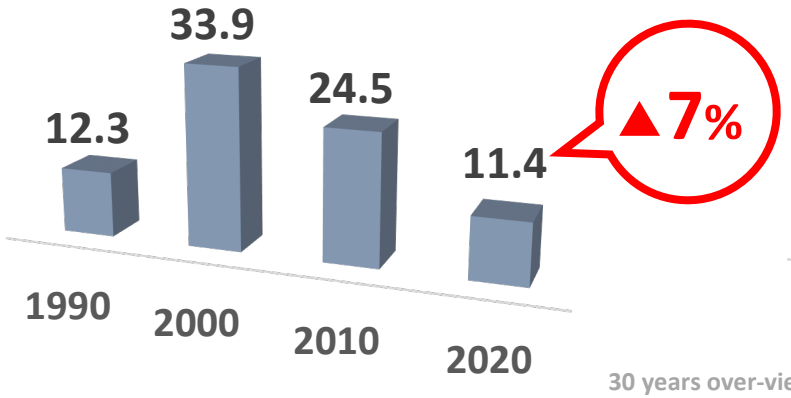
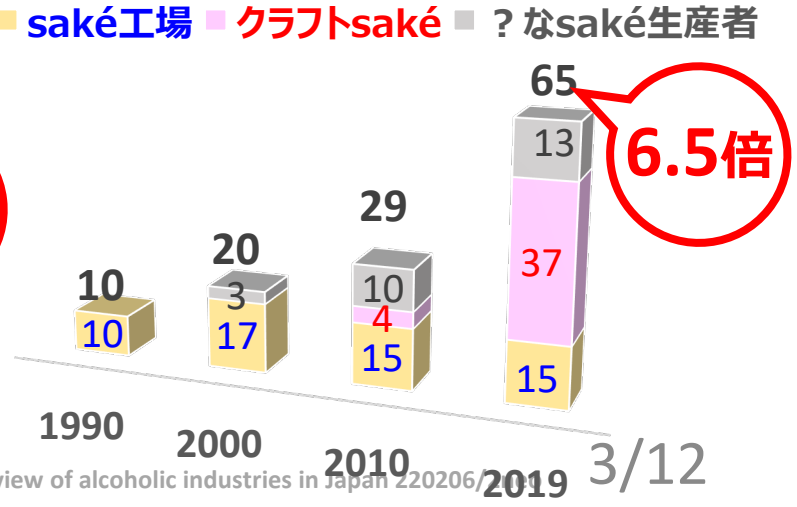


fig.Sa6 海外のSaké生産者（社）



数字で見る酒類業界の30年：**Wine**

fig.Wn1 **ワインの課税移出数量 国産と輸入（万KL）**

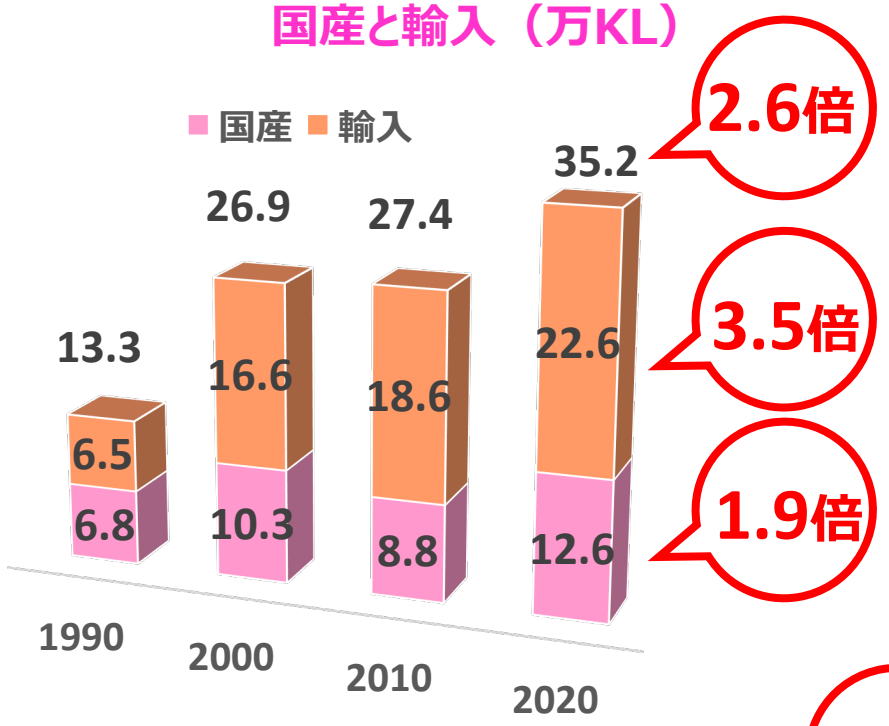


fig.Wn2 **全国のワイン製造場数（場）**

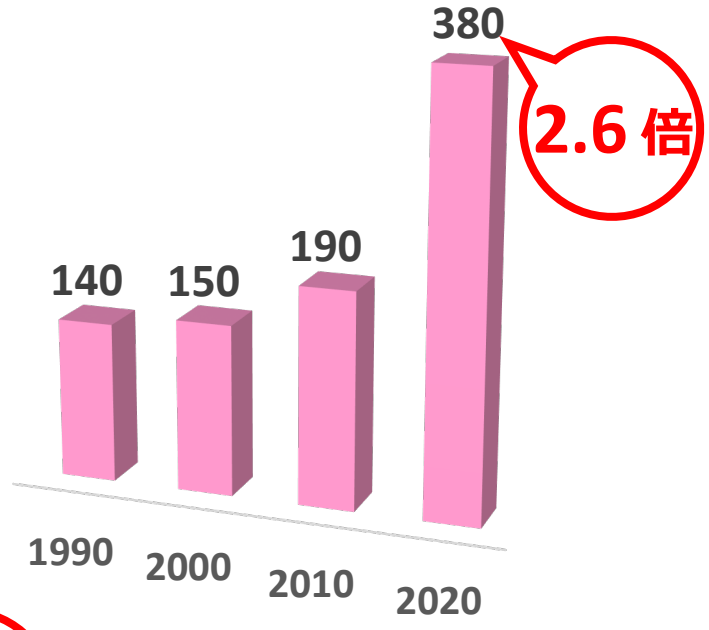


fig.Wn3 **山梨・長野・北海道のワイン製造場数（場）**

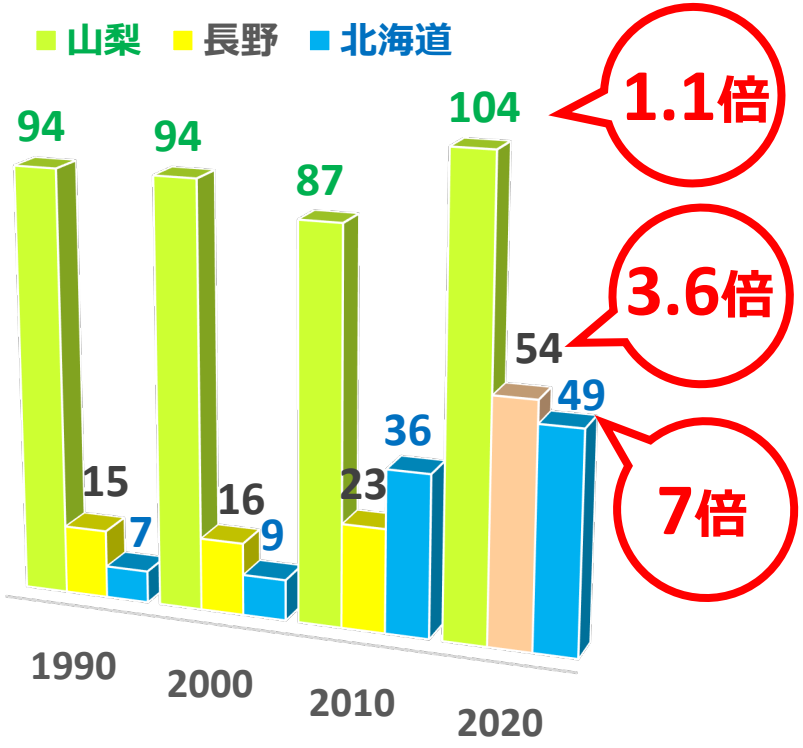


fig.Wn4 **びん内二次醗酵スパークリングを市販するワイナリー数（概数）**

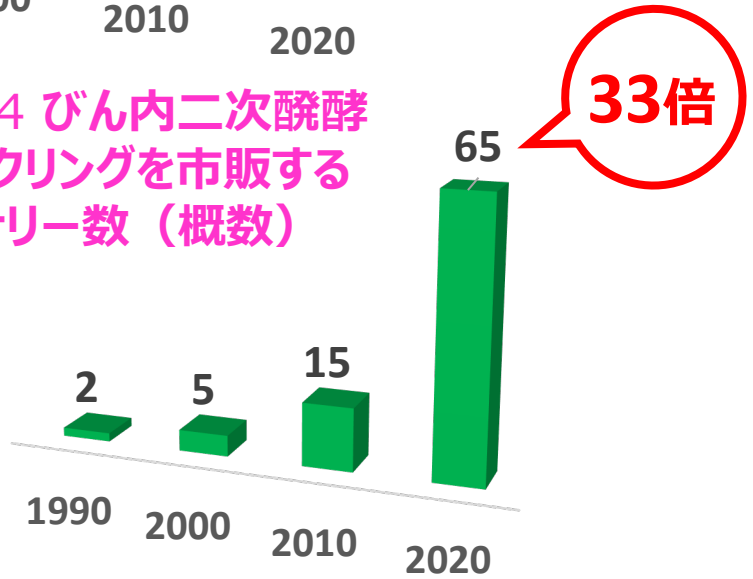


fig.Wn5 **ワイン栓の世界動向の年代記**

1990	2000	2010	2020
1990年　ほぼ「コルク栓」の時代（天然、圧搾、テクニカル）	「合成コルク」が増勢の時代（TCA問題）	「30x60 スクリューキャップ」が増勢の時代（OTR問題）	天然コルクの巻き返し＋スクリュー・ノマコルク・天然コルク・ヴィノロックなど併存の時代

数字で見る酒類業界の30年：**Whisky**

fig.Wh1 ウイスキーの課税移出数量 国産と輸入（万KL、50年表示）

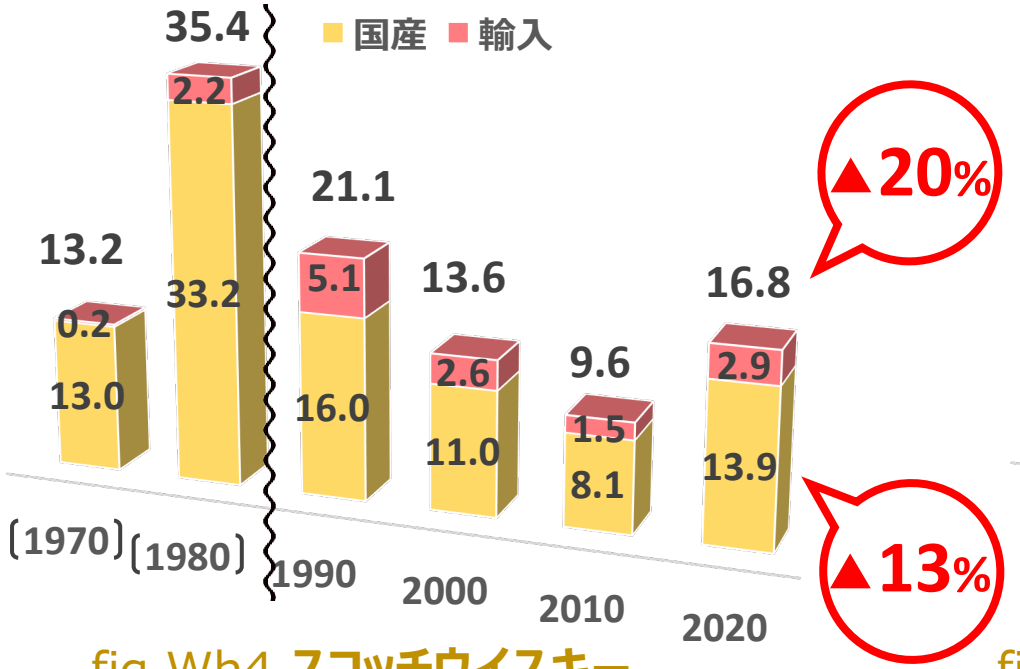


fig.Wh2 ウイスキーの製造場数（場、概数）

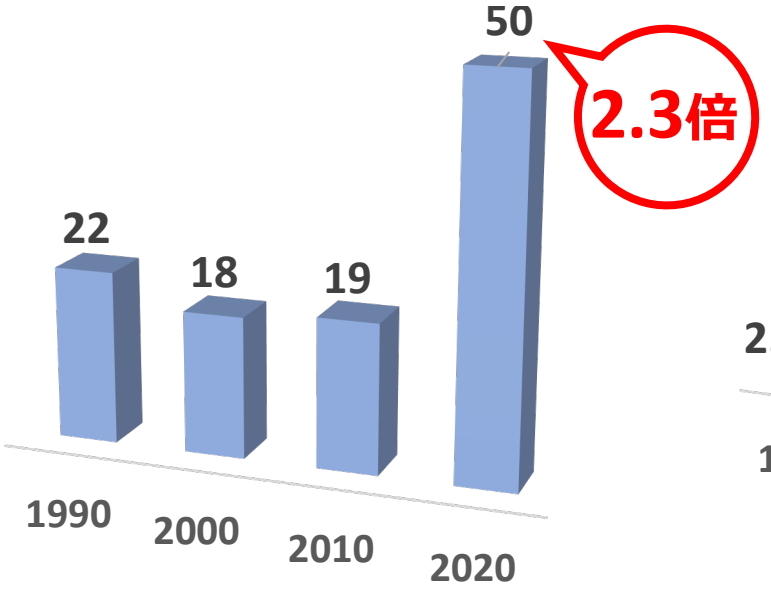


fig.Wh3 日本ウイスキーの輸出 参考比較に清酒も表示（億円）

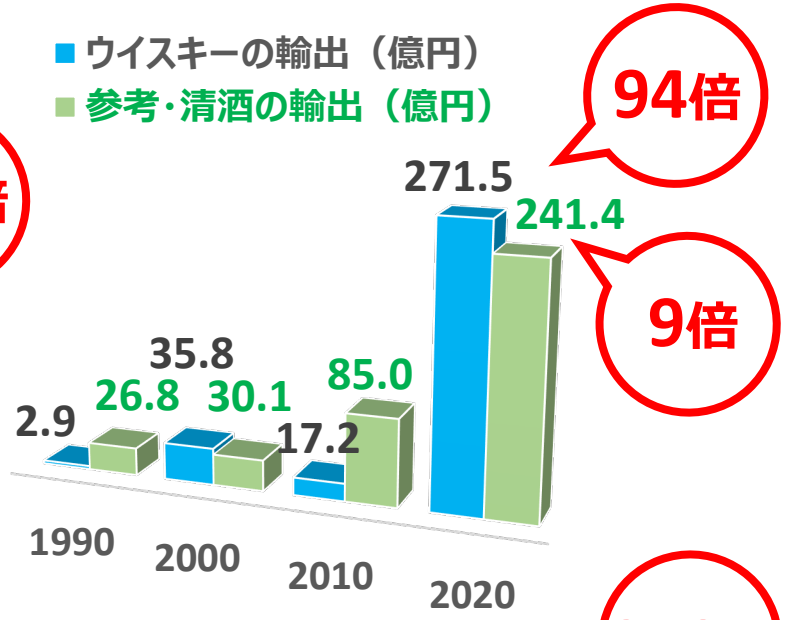


fig.Wh4 スコッチウイスキー蒸溜所数

fig.Wh5 アイリッシュウイスキー蒸溜所数

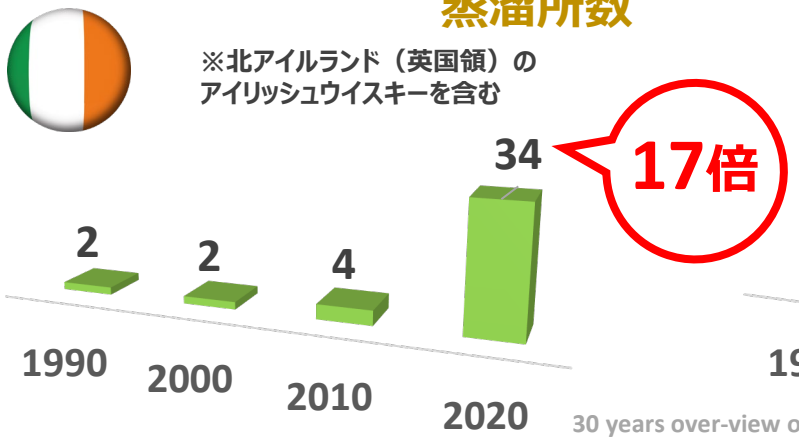
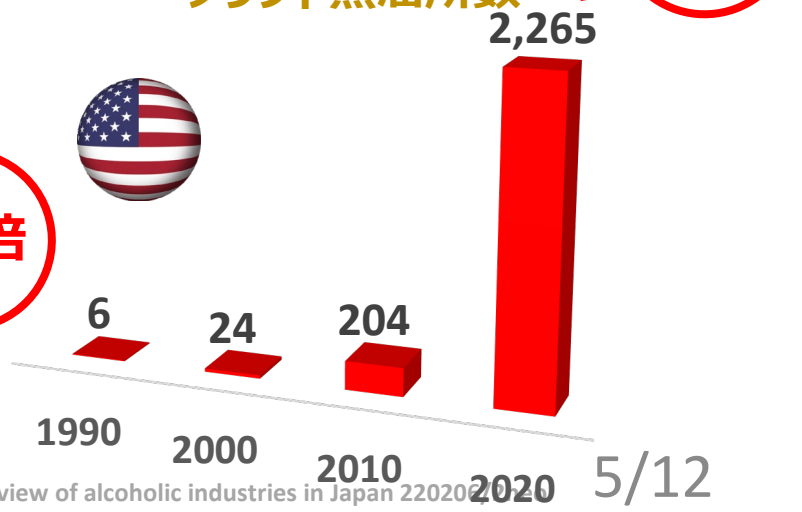


fig.Wh6 アメリカのクラフト蒸溜所数



数字で見る酒類業界の30年：Shochu

fig.Sh1 本格焼酎と甲類焼酎の出荷量（万石）

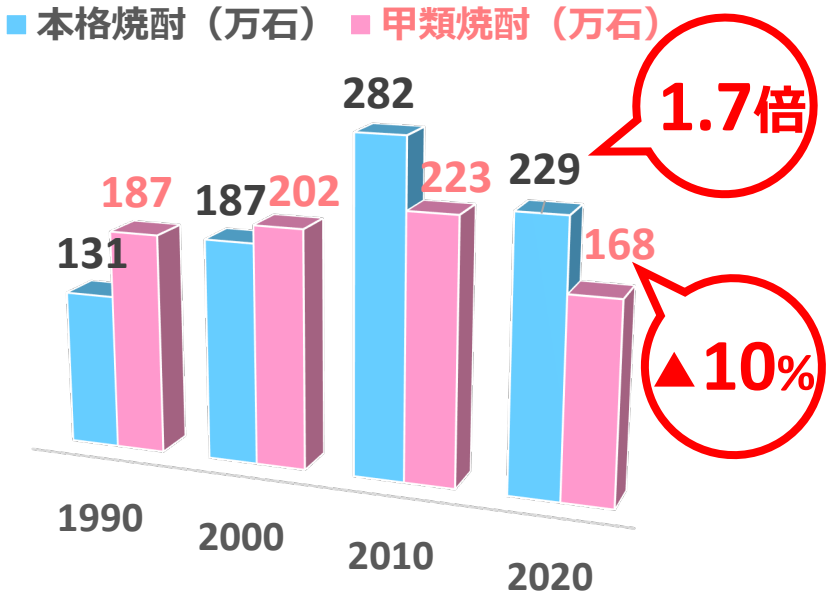


fig.Sh2 本格焼酎の種類別シェア（%）

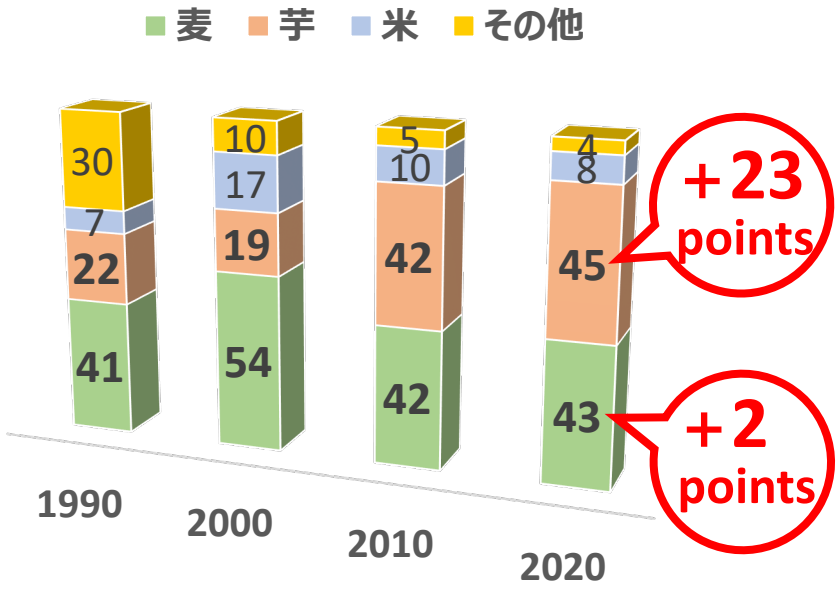
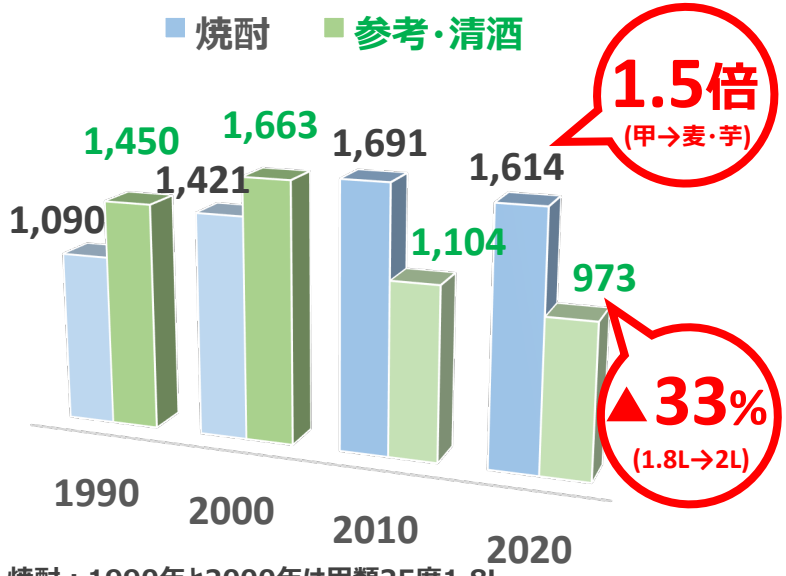


fig.Sh3 焼酎の小売物価統計 比較に清酒も表示（円）



焼酎：1990年と2000年は甲類25度1.8L、
2010年は麦25度1.8L、2020年は麦または芋25度1.8L
清酒：1990年と2000年は2級・佳撰の1.8L、
2010年と2020年は普通酒の2L紙パック

fig.Sh4 泡盛の出荷量（万石）

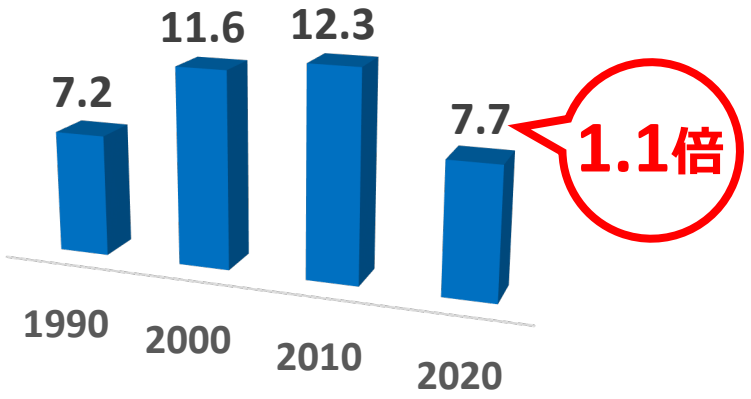


fig.Sh5 焼酎の輸出（万石、億円）

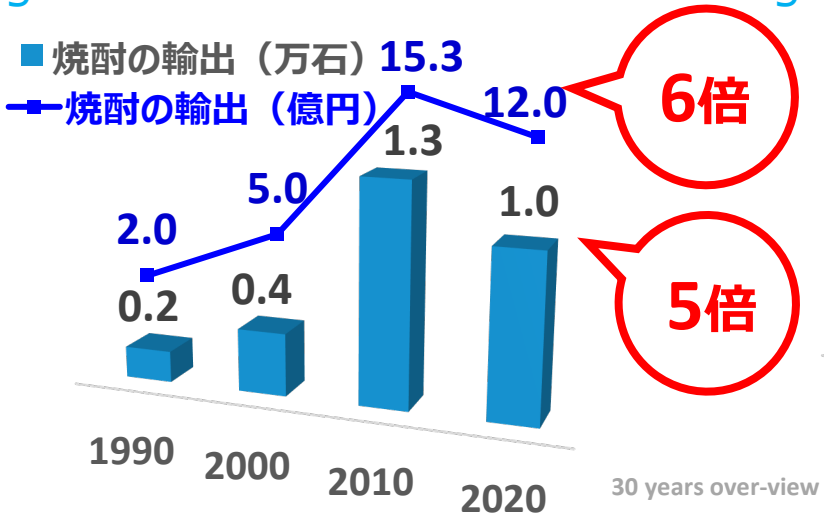
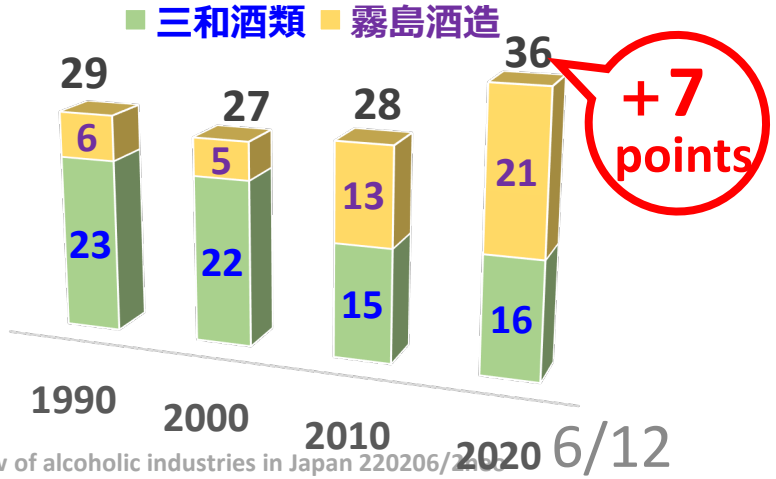
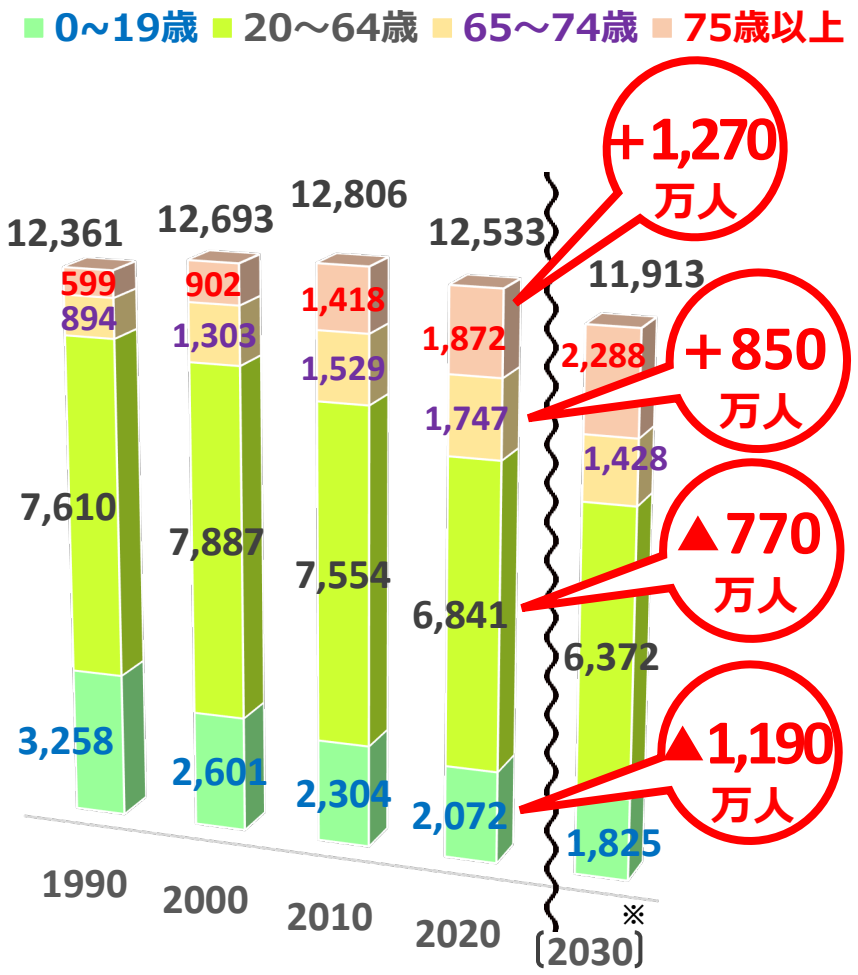


fig.Sh6 本格焼酎トップ2社のシェア（%）



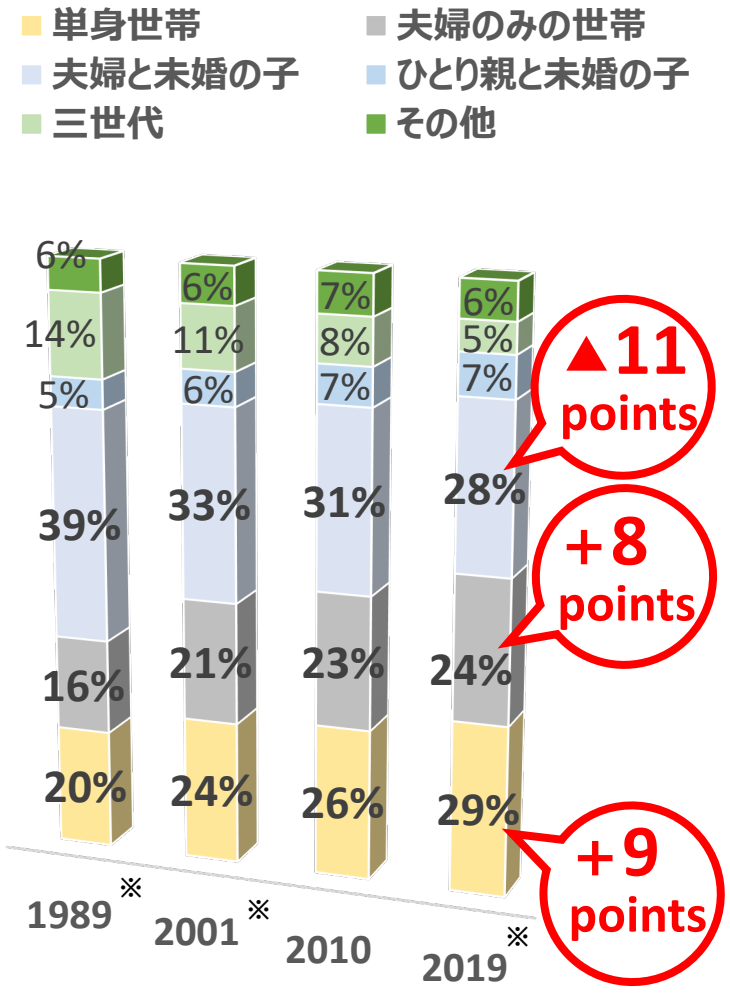
数字で見る30年：Appendix (Economic & Social counts)

fig.A1 日本の人口構成
（万人、2030年予測も表示）



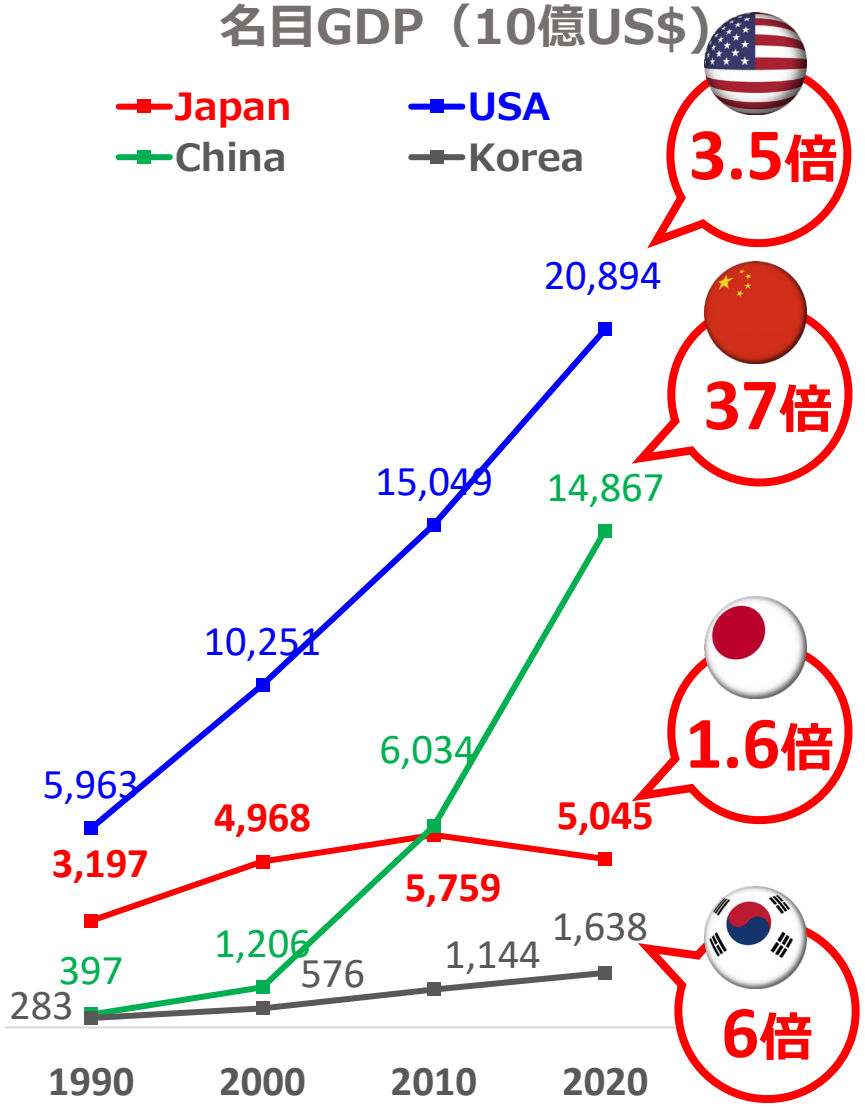
※ 2030年は、国立社会保障・人口研究所2017年発表の中位予測。

fig.A2a 日本の世帯構成



※ 1990、2000、2020の比較可能なデータがなかったので、1991、2001、2019としている。

fig.A3a （参考）日・米・中・韓の名目GDP（10億US$）



数字で見る酒類業界の30年：注釈

fig.B2 **世界のビール市場（万KL）**
出典：「キリンビール大学」の「世界の生産量」
ただし、2020年は「世界の消費量」

fig.B3 **日本のクラフトビールの醸造所数**
出典：きた産業

fig.B4 **アメリカのクラフトビールの醸造所数**
出典：Brewer's Association

fig.B5 **出荷量の世界ランキング**
1990年のデータがないので、1986年を記載。出典：醸協1987年「世界の主要国におけるビール市場の動向」　その他の出典：Barth Haas Report

fig.Sa1 **日本酒の生産量（万石）と製造場数（場）**
生産量は、国内向け＋輸出。2020年は約13万石の輸出分を含む。
1990-2010年は「主たるもの」が清酒の場数。2020年は国税庁の令和2年度酒税総括表の1,550場を引用。実際に清酒醸造を行ったのは1,200場以下。

fig.Sa2 **日本酒の一升びん（億本）と紙パック比率（%）**
一升びんは清酒用のみの数字で、焼酎用・醤油用などは含まない。新壜＋回収壜、2020年は当社の推定。
紙パックは、酒類食品統計月報の過去情報などから、当社が推定。

fig.Sa4 **市販酒でびん燗殺菌を採用している蔵数（推定、概数）**
当社の「びん燗対応キャップ」の販売実績などからの推定。市販酒用にびん燗する蔵元の数で、鑑評会用は含まない。

fig.Wn2 **全国のワイン製造場数（場）**
1990～2010年の数は、果実酒免許保有者の数と相当異なるが、このデータの出典は、きた産業による継続調査「ワイナリーリスト」ed.1＝2002年版～ed.15＝2020年版による。1990年は推定。

fig.Wn4 **びん内二次醗酵スパークリングを市販するワイナリー数（概数）**
1990年2社＝タケダワイナリー、池田町（2021年メルマガから修正）
2000年5社＝＋マンズ、ココファーム、機山洋酒（2021年メルマガから修正）
2010年15社程度＝＋小布施、サンクゼール、マンズ、勝沼醸造、ルミエール、フジッコ、カタシモ、安心院、カーブドッチ
2020年65社程度＝（略）

fig.Wh1 **ウイスキーの課税移出数量国産と輸入（万KL、50年表示）**
2020年の国産ウイスキーの約半分がサントリー、その半分がニッカ。残りが各社。

fig.Wh2 **ウイスキーの製造場数（場、概数）**
1990年・・・22程度※ 80年代から継続するいわゆる「地ウイスキー」が、他にも数社存在したと思われるが正確に捕捉できない。
2000年・・・18社（ただし、実際に蒸留・製造していたのは11社程度かもしれない）
2010年・・・19社（ベンチャーウイスキーさんが2008年から蒸留開始で＋１）
2020年・・・50程度（ただし50のうち、2020年時点で商品未発売が7社程度）
2020年は50「程度」と書いているのは、どこまでカウントをするかの判定が難しいから。ウイスキー免許を取得した会社はもっと多いが、「商品未発売だが自社の蒸留器で商業蒸留を開始しているところ」「蒸留していないが輸入品などで自社ブランドを商品化しているところ」までを当社の認識の範囲でカウントしたもの。誤差もあるかもしれない。

fig.Wh4 **スコッチウイスキー蒸溜所数**
「ウイスキーコニサー資格試験教本2020」（土屋守著）の各蒸溜所の解説文から、各年代ごとに「活動している（休止していない）と考えられる蒸留所」を私がカウントしたもの。蒸留していなくてもストックがあって製品を販売している場合、蒸留していてもまだ製品を出していない場合など、どこで区切るかによって数が変わるので正確な判定は困難。あくまで概数。

fig.Wh5 **アイリッシュウイスキー蒸溜所数**
IBECやIrish Whiskey Associationなどによる。（2021年メルマガから修正）

fig.Wh6 **アメリカのクラフト蒸溜所数**
American Craft Sprits Associationによる。

fig.Sh3 **焼酎の小売物価統計参考比較に清酒も表示（円）**
焼酎：1990年と2000年は甲類25度1.8L、2010年は麦25度1.8L、2020年は麦または芋25度1.8L
清酒：1990年と2000年は2級・佳撰の1.8L、2010年と2020年は普通酒の2L紙パック

fig.Sh5 **焼酎の輸出（万石、億円）**
2007年以前の数字は、国税庁の「輸出免税数量」。貿易統計と違って量のみの記載なので、輸出金額は推定。暦年でなく年度（4月～3月）の数字。 2010年以降と合わせるため甲＋乙。
財務省貿易統計で「しょうちゅう・220890100」が区分されたのは2008年から。（それまでは「その他の酒・220890000」に含まれていた） 暦年の数字。甲乙を含む数字だが、量の9割が乙（本格焼酎）

fig.Sh6 **本格焼酎トップ2社のシェア（%）**
酒類食品統計月報の過去のデータから引用

数字で見る30年：追加資料

fig.Sa7 清酒生産量にしめる輸出量の比率（%）

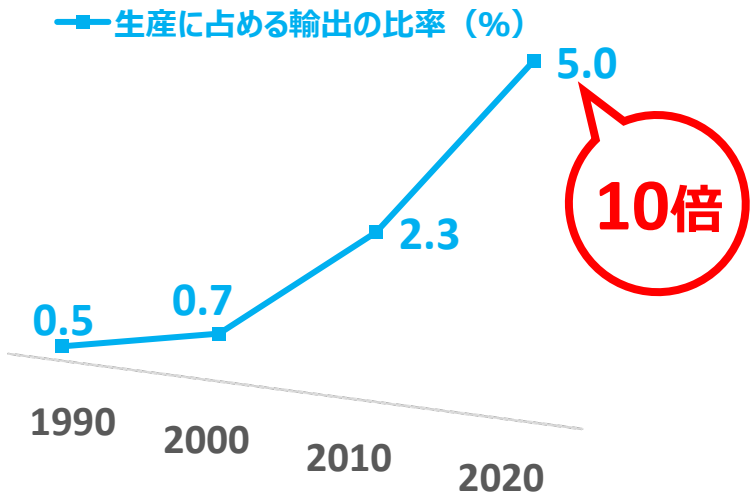
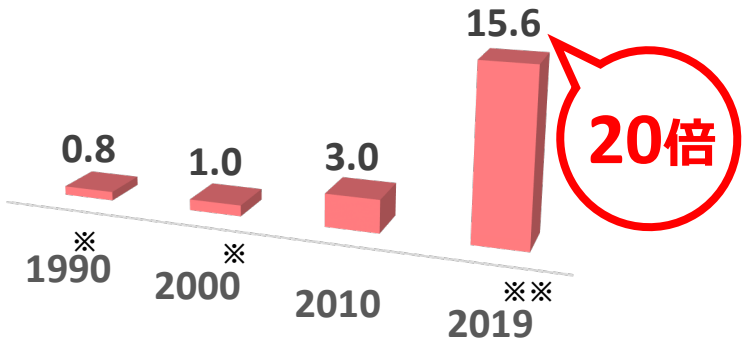
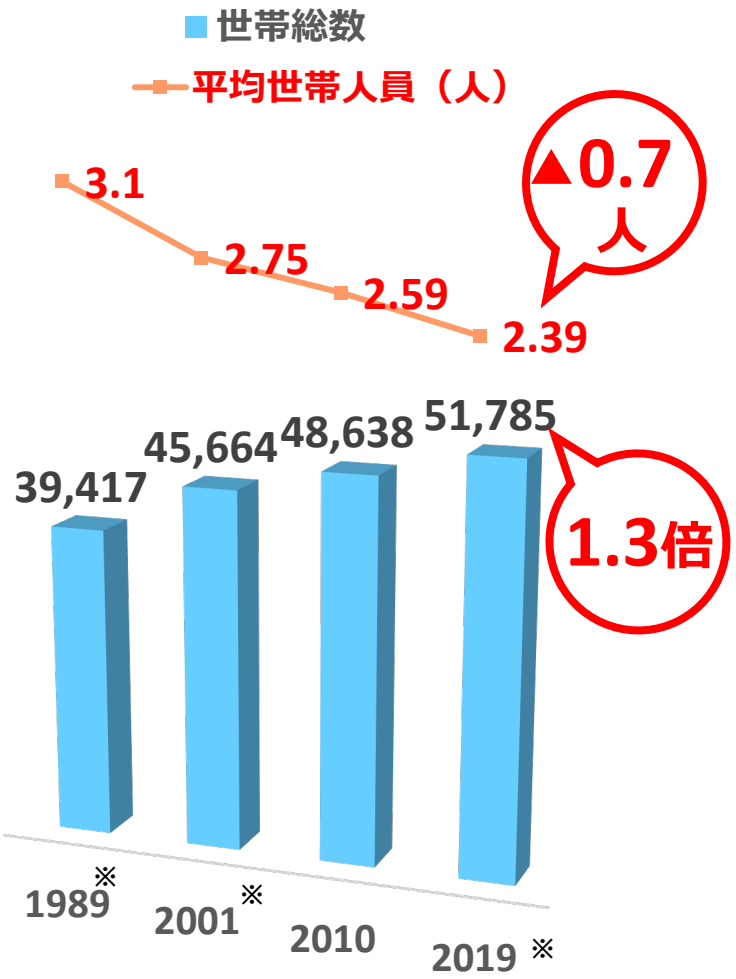


fig.Sa8 海外の日本食レストラン（万店）



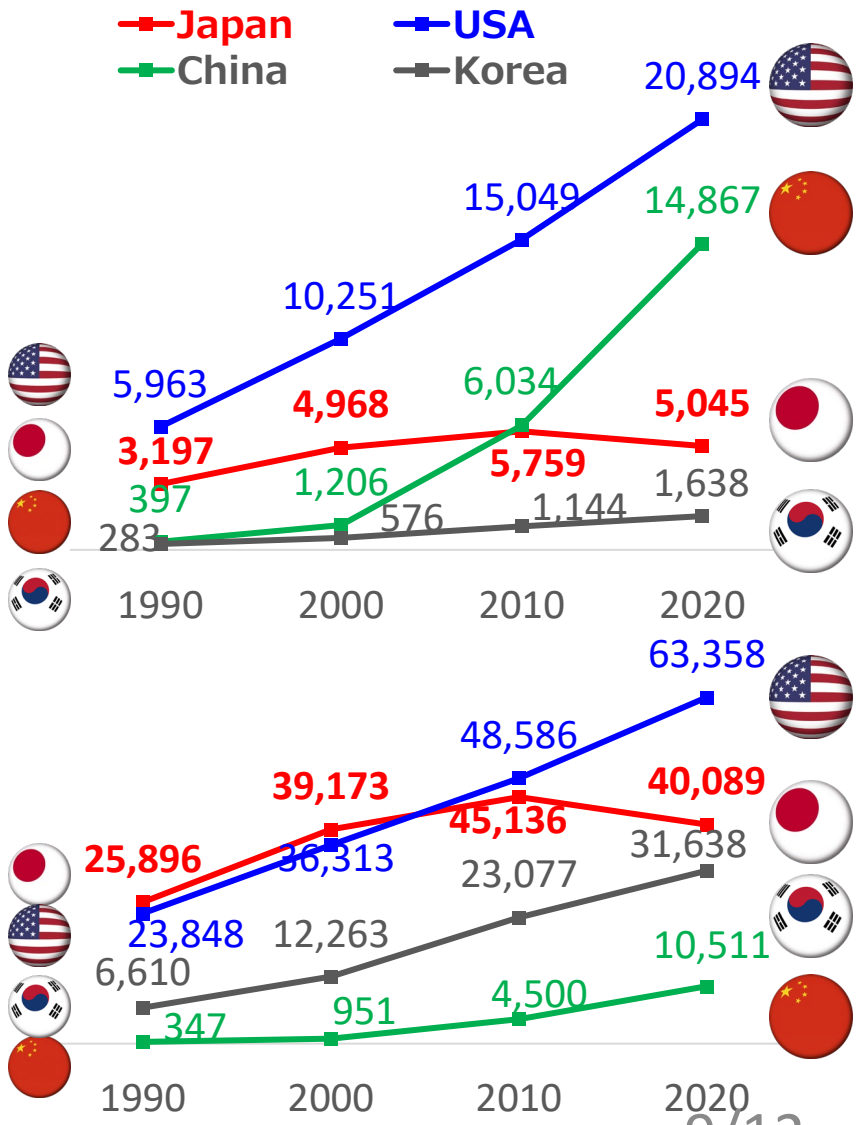
※　農水省が調査結果を発表しだしたのは2006年から。
1990年と2000年は、筆者の体験からの感覚的推測。
※※　2020年の数字はなく、直近の発表は2019年。

fig.A2b 日本の総世帯数と1世帯の平均人員（人）



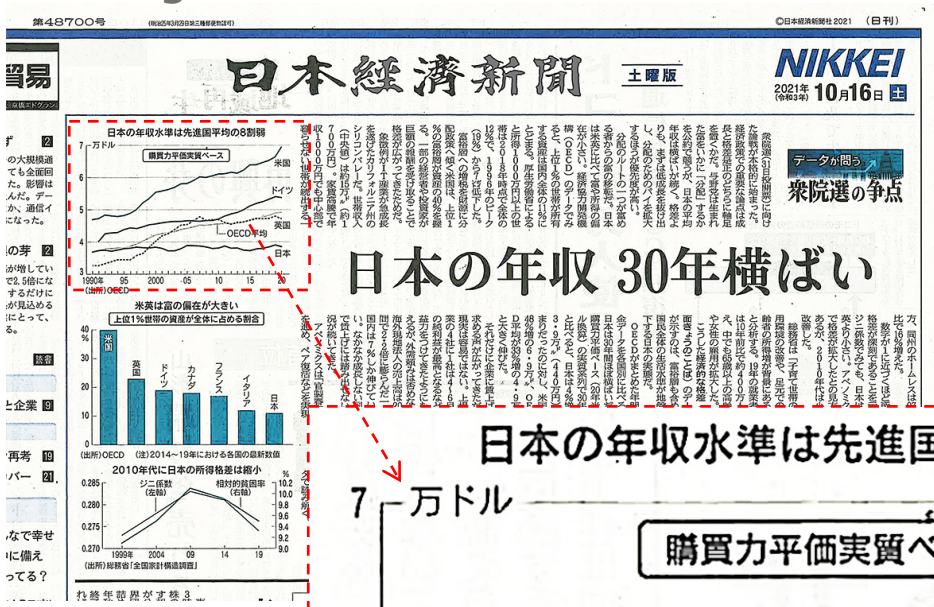
※　1990、2000、2020の比較可能なデータがなかったので、1991、2001、2019としている。

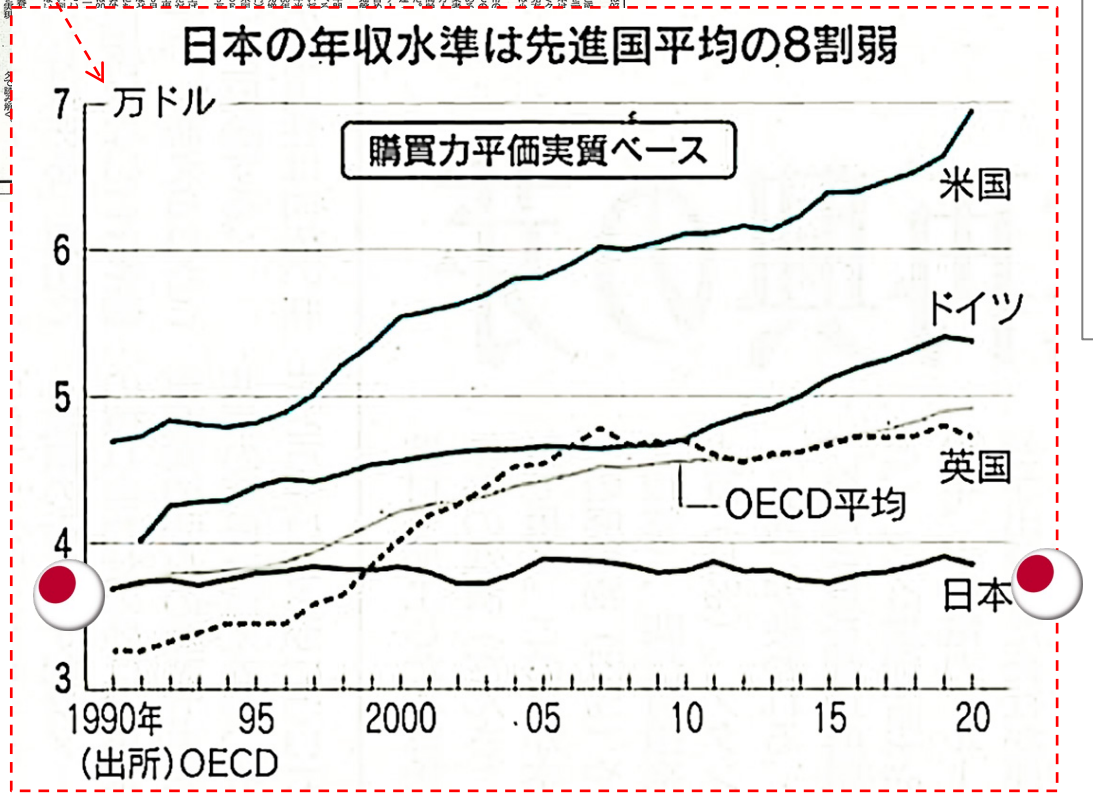
fig.A3b （参考）日・米・中・韓のGDP
上：名目GDP（10億US$）
下：1人当たり名目GDP（US$）

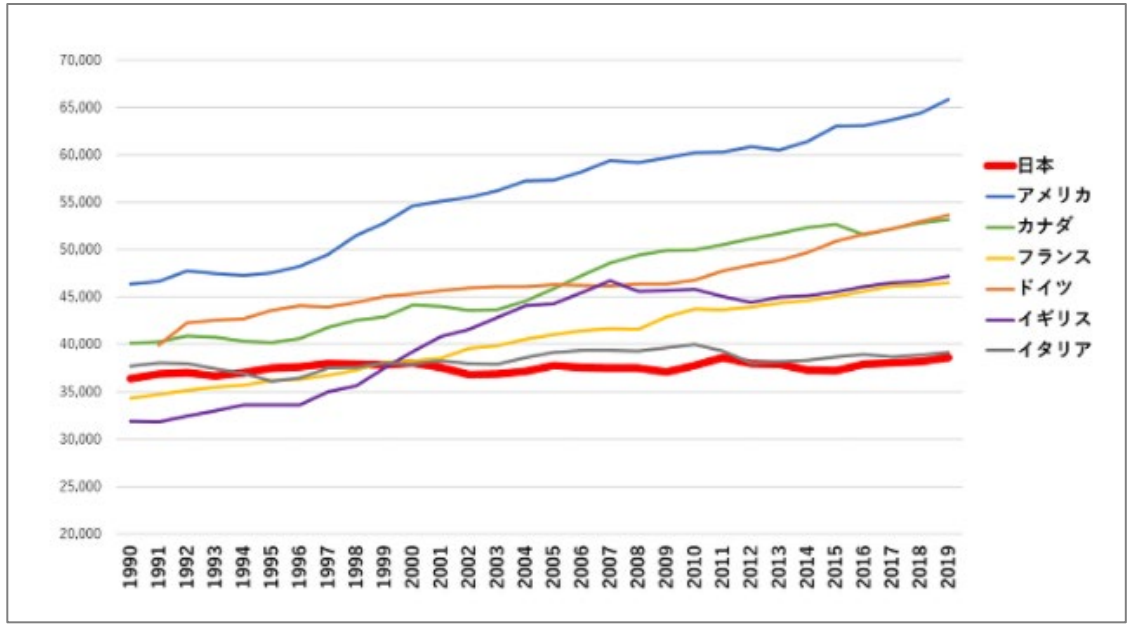


数字で見る30年：追加資料

fig.A4 （参考）日本の賃金、30年の変遷（資料2つ）



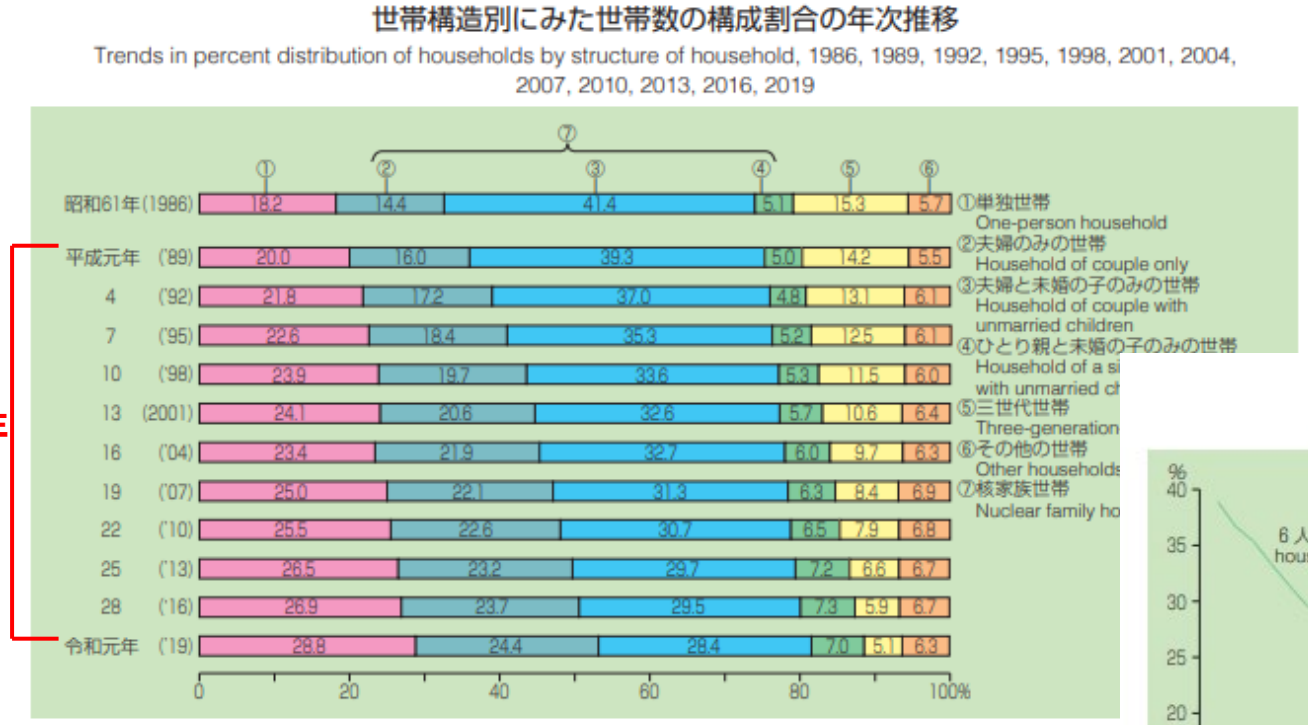




リクルートの記事
「安い賃金」を甘受してきた日本の労働者―ボイスは集団から個人へ―2021年09月24日
出所：OECD.Stat “Average annual wage”
https://www.works-i.com/project/voice/employment/detail005.html

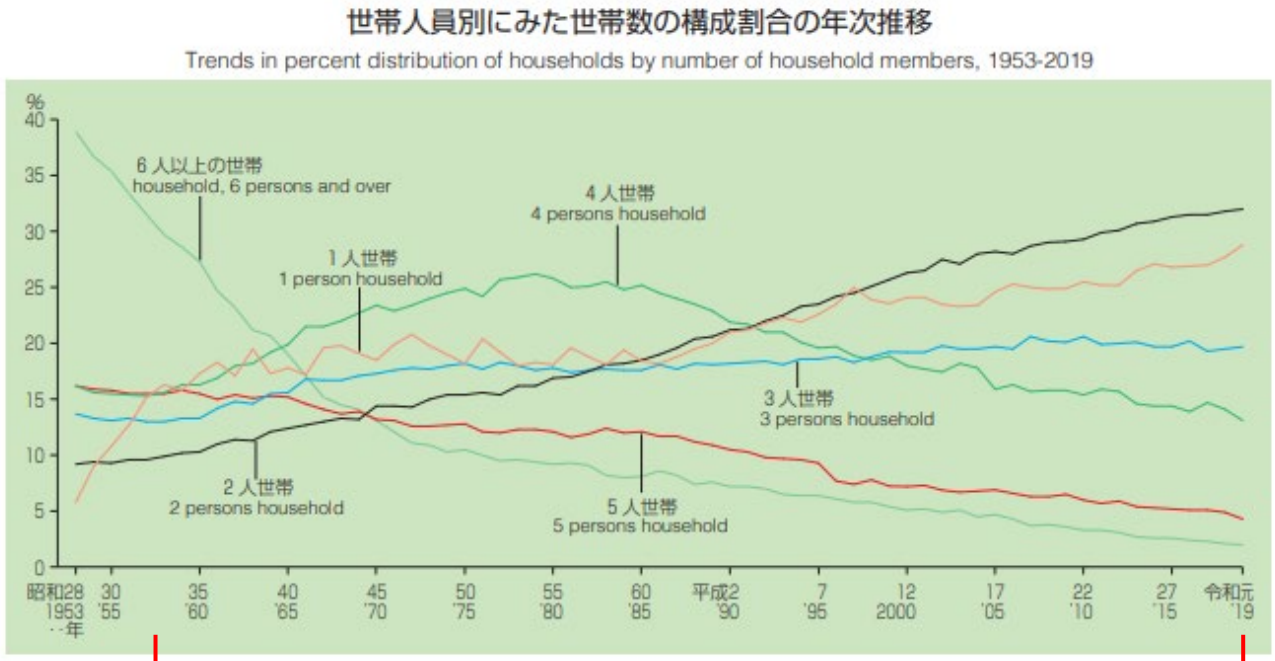
数字で見る30年：追加資料

fig.A5 （参考）日本の世帯構成、30年･60年の変遷



30年

出所：厚生省「令和3年　グラフで見る世帯の状況」2021年3月公表
https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/20-21-h29.pdf



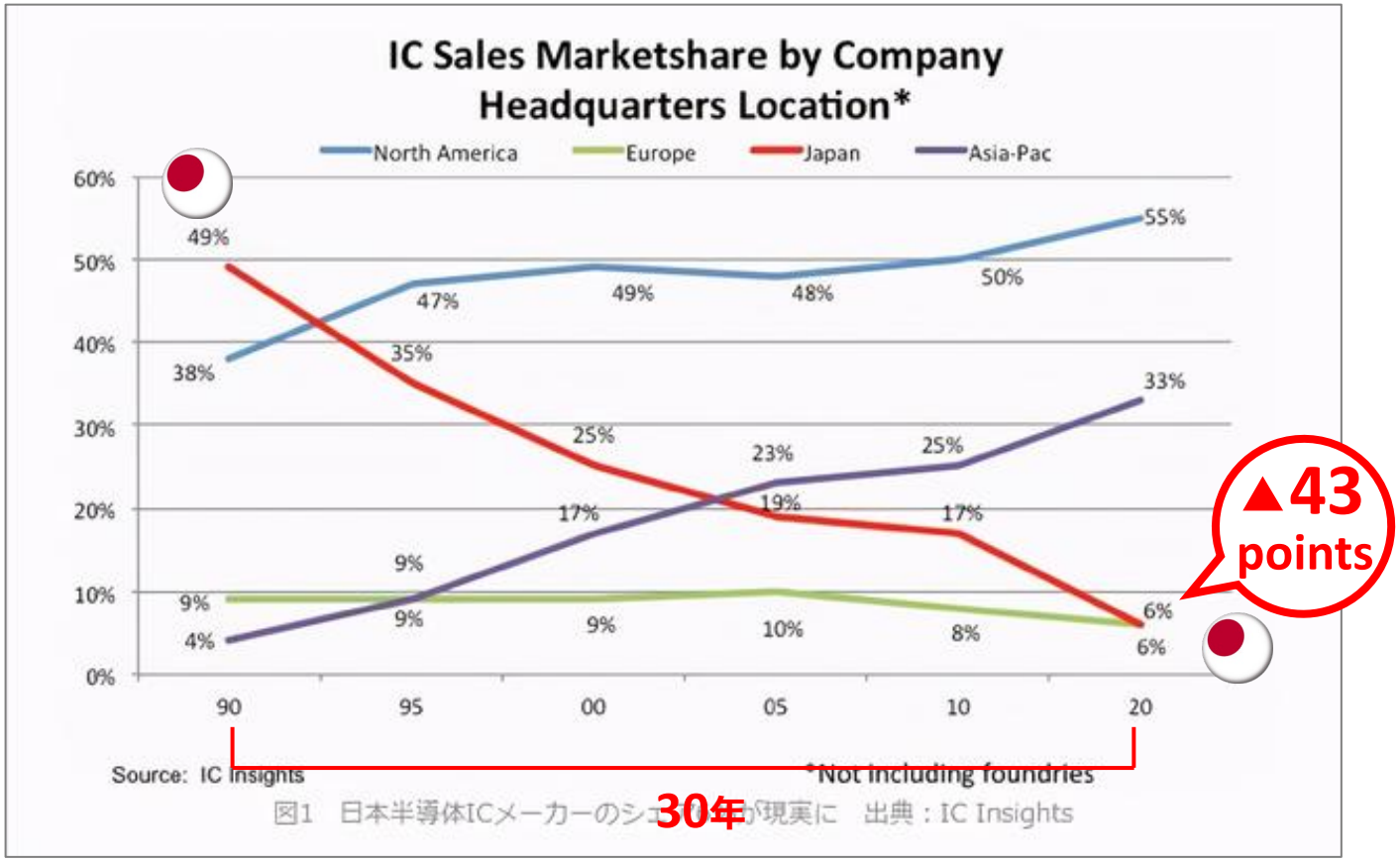
60年

数字で見る30年：追加資料

fig.A6 日経平均株価、30年の変遷

日経新聞電子版の記事
日経平均が一時3万円回復　90年8月以来、経済回復期待 - 2021年2月15日
https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGD150I60V10C21A2000000/

fig.A7 （参考）日本の半導体の世界シェア、30年の変遷



Dardanesの記事
Japan's semiconductor IC global market share has dropped to only 6% - 2021-04-20
出所：IC Insights
https://daydaynews.cc/en/constellation/japanese-reporters-sigh-japans-semiconductor-ic-global.html

end of paper 22.02.09/2neo